

## 「野性・知性・感性を育む場“てら子屋”の試み」

中間 真一（ヒューマンルネッサンス研究所 主席研究員）

皆さん、こんにちは。ただ今紹介いただきましたヒューマンルネッサンス研究所（HRI）の中間と申します。今日はどうぞよろしくお願いいたします。

今日は先生方の講演と後のディスカッションの間の時間をいただき、子どもに関連する取り組みの発端となった調査のお話と、そこから始まった、「てら子屋」という実践的な取り組みの中で感じてきたことをご紹介しますと思います。

私どもヒューマンルネッサンス研究所は、子どもの研究に特化した研究機関ではありません。オムロンという会社の中の一研究部門になります。少々特徴的な未来志向の経営理念を持った会社であるがゆえに、未来研究を進めていますが、そのときに「子ども」は非常に大切なテーマになるわけです。

その未来の見方ですが、基本的には「ポスト工業社会」を念頭に置いています。そして、HRIでは2025年ぐらいの社会を「自律社会」というコンセプトで見たいこうとしています。その手前には、工業社会の最終局面から新たなパラダイムに移る混沌期としての「最適化社会」、また、自律社会の先には「自然社会」という仮説を立てて取り組んでいます。

この「自然社会」というのは、エコロジカルな社会という意味合いもありますが、さらに、今日のテーマにも関連しています。ヒトという動物に、そもそも備わっている遺伝的なプログラムがあると考え、そのような遺伝的プログラムが機能するのに適した社会とはどういうものだろうかという見方もしようとしています。現代社会は、もしかするとそのプログラムに適していない社会かもしれないという疑問を持っています。そういうわけで、「エコロジカル」＋「ヒトという動物の遺伝的プログラムに自然な社会」という意味合いを込めています。

2025年頃の自律社会、その中では、多様性・自律性・創造性・互惠性・寛容性・未来可能性、このようなキーワードを持ちながら予測と想像を進めています。未来予測の切り口は、様々に考えられるわけですが、私はその時期の未来社会の中核を担っている人たちは誰だろうということから考え始めました。それは、やはり今の子どもたちということになります。そこで、まずは子どもを探ってみようと調査を始めました。

子どものことを調べたいと言っても、アンケートやインタビューという方法では、少なくとも私たちが知りたい情報、子どもたちの本音、心の中の様子というような情報は、なかなか取れないと思いました。私の前職はフィルム会社であり、写真というメディアに対する思い入れもありました。ちょうど、初めて調査を実施した1995年は、使い捨てカメラの普及した頃だったので、「これを、子どもたちに渡して、写真を撮ってもら

ったらどうだろう」と思い付き、カメラのファインダーを通して、子どもたちの心が選んだ被写体を見たいと思い、写真投影法による調査を試してみました。当時、調査に協力してもらった9歳、10歳のお子さんたちが、今や22～23歳の大学生や若い社会人となっているわけです。

今日ご紹介するのは、イタリアと日本で実施した調査結果ですが、特にイタリアの子どもたちの写真を紹介しながら話を進めたいと思っています。1995年10月、イタリア中央部ウンブリア州のペルージャという、サッカーの中田選手もプレーしていた街です。一方、日本での実施場所は、東京郊外の大型団地内です。9歳、10歳という対象年齢の設定は、写真をカメラで意図を持って撮れる年齢で、なおかつ最も低い年齢に設定したいと考え、試行してみた結果です。

それでは、イタリアの写真を紹介します。いろいろな写真があります。まだデジタルではなくフィルム写真ですから、ネガ上で被写体の順番を追うことがしやすいのです。

ところで、イタリアの9割以上の子どもたちが最初に被写体としたものがあつたのです。これは何だと思いませんか。それは「両親」だったのです。ここに何枚か出しましたように、仲がよさそうな両親、家でくつろいでいるご両親、本当にびっくりしたのですが、9割方の子どもたちが最初に被写体を選んだのは両親でした。そして、おじいちゃん、おばあちゃん、その他の家族に広がっていくというところがありました。

次に、彼らの眼差しは「自分の部屋」に移っていきます。普通の家庭の子どもたちのはずなのですが、ほとんど自分の子ども部屋を持っており、自分なりにいろいろと整えてある様子もよく分かります。

その次ぐらいになると「お気に入りグッズ」が盛んに出てきます。95年ですから、かなり型の古いテレビゲームの道具とかスウォッチ、初期のPCだったり、楽器だったりします。

これは本当にイタリアらしい写真です。日本の子どもたちからは出てこなかったのですが、上から下まで、服から靴までをコーディネートして、ベッドの上に並べて写真を撮ってきたり、クローゼットを開いて自分のファッションを見せたりしていました。「オシャレのアイテム」です。このように「自分の構図を作る」というところに彼らのこだわりが伝わってきました。

彼らが撮るもの自体は様々でも、同じような空間を移動していくプロセスが、とても興味深いのです。そして、さらに広がる被写体としては「学校と友達」です。イタリアの小学生は、当時こういう制服というか「うわっぱり」のようなものを着ていたのです

が、学校の仲間たちを撮っています。

使用したカメラは 27 枚撮りですが、これを全部使い切っているという事実も、日本の子どもと比べたときのイタリアの子どもの撮り方の特徴でした。日本の子はあまり全部を撮り切っていませんでした。彼らは使い捨てカメラを渡した時間として 2 週間ぐらいを撮っているのですが、それは間に土日を入れているという意味合いからですが、そうすると自分の住んでいる町、郊外のおじいちゃんの畑なども被写体として取り上げられる機会が生まれてきます。一番左は自分の通っている教会ですが、このように自分の暮らしの場に、彼らの被写体は広がっていったのです。

これに対して日本の子が撮ってきた写真には人間が現れない。それから、閉じこもっていて動かないというのが大きな特徴として明らかです。

日本の子の写真は、承諾を得られていない等の理由で、多くをお見せできないのが残念ですが、驚くようなものもありました。例えば、人間が被写体で出てきたと思うと、それは学校の友達と行った遠足の写真を写真で撮ったものであったり、家族で行った旅行の写真を写真で撮るとか、そういうものが出てきます。

一番下の写真は、とても身体の柔らかい元気な女の子だと思ったのですが、彼女の前にはずらりとスナック菓子が並んでいます。また、男の子の場合には、やはり自動車など車輪の付いたおもちゃ、女の子は動物のぬいぐるみなどが、お気に入りとして多く出てきます。さらに、気になった点としては、日本の子どもたちが、27 枚撮り切らずに終えている場合が多いということもありました。

もちろん、この写真だけで日本の子どもたちの特徴を一般化するというのは難しいと思います。文化的な差などもあると思いますし、少数の限られたサンプルでもあります。しかし、あまりの結果の差、すなわち写真の撮り方の差はショッキングだったわけです。

この図は、得られた写真の被写体を、内向きなのか外向きなのか、また人間や自然環境に向いているのか、人工物の環境に向いているのかという観点から座標をとってみると、日本の子どもたちが撮ってきた写真は圧倒的に左下の象限に当てはまりました。大都市部の子どもだからそうなるのではないかと思って、後から農村、山村部でも実施してみたのですが、大都市部との差異は無いどころか、より顕著な傾向として結果に表れました。

それに対して、イタリアの子どもたちが撮ってきた写真は、自分の両親から始まります。そして、もちろん人工物や内向きの被写体もありましたが、暮らしている社会に広がっていく傾向が明らかでした。この結果に、私は本当に驚き、私の子どもに対する関心とリサーチの出発点となったのです。

ですから、その後も機会のあるたびに、いろいろな国や地域で写真を撮ってもらってみました。例えば、ニューヨークのハーレム地区の小学生たちは、イタリアの子の写真とは質は違い、鋭いまなざしや生々しい生命感が感じられました。そして前向きでした。

オランダなどの子どもたちが撮ってきた写真は、やはりイタリアと似たような豊かなやりとりのようなものが感じられました。オランダで実施した結果は、現地の美術館も興味を示し、その後ヨーロッパで巡回写真展にも発展しましたが、なかなか好評だったようです。

そのような結果に対して、私自身はあまり日本を悪く言うつもりもないのですが、日本の子どもたちのコクーンの中に引きこもるような傾向が、あまりにもショッキングだったわけです。

何で閉じこもるのだろう、あるいは本来はどうあることが望ましいのだろうと考えたときに、ちょっと古いのですが、清水幾太郎先生の『社会的人間論』のような話にたどり着きました。同心円の最も内側に家族集団があり、遊戯集団、隣人集団、学校集団、職業集団、基礎的社会、生活世界と広がっていくわけです。皆さんが今ご覧になって分かるとおり、イタリアの子どもたちが撮った写真というのは、ちょうど遊戯集団、隣人集団、学校集団ぐらいのところに居ながら、中心の家族を見ながらも、外側の社会へと広がっていく様子を感じられたわけです。

私は、発達心理学や教育学の専門家ではありませんが、この結果に対して危機感を抱いたのです。そして、様々な場で「日本の子どもが大変だ、大変だ」と言い続けました。また、そう言っているだけではオオカミ少年のようなので、自らアクションしなければいけないと思い、子どもたちを集めたワークショップのような実践も始めました。私の所属する研究所は、シンクタンクにとどまらず、ドゥタンクとして兆しづくりまでやってみようということを目指しています。自律社会という方向に値するものであれば、その兆しを作り、大きくしていけないかということなのです。

それで子どもを中心に、人間、社会、仕事、アート、科学・技術、自然、こういう分野に子どもたち好奇心を広げていけるような場づくりを目指し、豊かに関係性を広げていけるような社会環境づくりを考え始めたわけです。

「日本の子どもたちが大変だ、大変だ」と講演会等を通じて叫んでいましたら、あるとき、「あんた、そんなことを言っているのだったら一緒に幼稚園を開きましょう」と誘われまして、今日のテーマの「教育」のスタートの場であり、社会デビューの場でもある、幼稚園を開くのを手伝ったこともあります。もちろん、これは会社としてというのではなく、個人として関わったわけですが。

この風の谷幼稚園では、何をやろうとしたかという、体ごと遊ぶ、手を使う、たくさん歩く、親も一緒にと。当たり前といったら当たり前のことばかりなのですが、この当たり前が欠けていることが今の最大の問題ではないかと思ったわけです。ヒトという動物の当たりのスムーズなプログラムの実行が、うまくできないことになっている社会ではないかという気持ちもありまして、当たりのヒトの成長の場を目指した幼稚園を、風の谷幼稚園という名前を付けて 97 年に川崎市麻生区片平という山の中に開園しました。

そして、開園と同時に、幼稚園だけがよくても、さらに広がりを持てる道筋が欠けていてはしょうがない。私が先ほど問題意識を感じたところは、中心から連続的に開いていける場ということですから、何とかしてそれを作りたいと考えていました。

けれども、小学校、中学校、高校、大学と、すべての学校を開くなど、とてもあり得ないわけで、それは無理だと諦めざるを得ません。しかし、何かやりたいということで、「てら子屋」というワークショップのような場を、本当に実験的な試みですが、開き始めました。先ほどから先生方も自分のお子さんやお孫さんを共同研究者として紹介されていましたが、私の場合も自分の子どもを共同研究者、いや私の場合は実験台として、この中に放り込んで観察してきたわけです。

最初にお見せするキャンプは、子どもたちにとって、「あること」と「ないこと」の意味を感じてもらい、体験してもらうことはできないだろうかという問題意識から、山奥に子どもたちを連れだした時のものです。

決して、公道ではダンプの荷台に子どもを乗せるようなことをやってはいけないのですが、これはある林業家の山の林道なので、ダンプの上に、ヘルメットを付けた子どもを乗せています。かつて、木こりの人たちが一度山に入って仕事を始めたら、毎日下りてくると効率が悪いので、山の中に作業中の寝泊まりをするための守小屋を使っていたのですが、今は使っていません。そこで、小学校の低学年のころ、先ほどの先生がおっしゃった子ども期（3～7歳）という定義からすると、子ども期を経た子どもたちという年齢層になりますが、そういう子を集めて、山の中に入っていきます。もう、みんなキャーキャー騒いでいるわけです。守小屋に着いても、まだまだ騒ぎは収まりませんが、電気も何もないのです。「ないもの」というのは、もちろん電気もない、ガスもない、水道もない、電話もない、テレビゲームもない。そういう中に来てしまっているわけです。そうすると、彼らは直にやるものがなくなってきてしまい、私たち大人のスタッフに対して「何して遊べばいいの？」「次は、何をやるの？」と聞いてきます。与えられたイベントが無いと、つまらなくなってしまうのです。

このあたりは、先ほどの佐伯先生のお話と通じると思うのですが、子どもたちは「教えがられる」のです。だけど、私たちは何も指示せずに放っておきました。彼らに、

山の中は「ないもの」だらけというわけではなく、「あるもの」も多いことに気づいてほしいからです。時間がある、自由がある、自然がある、闇がある（この闇の存在価値は大きかったのですが）、生命がある、不思議や驚きがあるということに気づいてほしかったわけです。大人だと、なかなかこちらの「ある」側に気づけないのかもしれないのですが、子どもたちは1時間以内には移ってきてくれました。

夏の山奥に入ると、赤トンボがうじゃうじゃ飛んでいて、いくらでも素手で捕ることができます。何人かの子どもたちが、それらを虫かごの中にぎゅうぎゅうに詰め始めました。何をするのか、かわいそうではないかと思って見ていると、彼らは虫かごのフタを一斉にパッと開いて「トンボ花火」と言って遊んだり、自分たちで遊びを作っていくのです。

5年生ぐらいの子がそういうことをやり始めると、下の子はそれを見て「面白そうだな」、「僕もやりたいな」という顔でチャンスを探し始めます。それぞれ、自分なりの遊びを作っていくという連鎖の光景が見られるのです。

もちろん食事は自炊ですが、下の写真は食器を洗っているところです。この食器を洗った水は、すぐ下の沢に流れていきます。じつは、その沢の水を汲んで、自分たちは飲み水に使っています。そのことを自分たちでわかっていますから、彼らはなるべく石けんを使わずに皿をきれいにしようと考えます。残さずきれいに食べることから始まり、火を使うから、紙で拭いてそれを燃やすときに使えばいいではないかとか、僕らは何も言わないのに子どもたちがそういうことに気づき始めます。

このシーンなどは、子どもにとって、かなりきついことをやっています。もはや沢登りレベルではなく、かなり厳しいシャワー・クライミングです。子どもたちは、いつも眺めているだけの水とは違うことに気が付きます。水の重さを感じたり、勢いや力を感じたり、水って怖いなということも、ここでみんなすごく感じるわけです。彼らの表情は、一気に真剣になりました。

真ん中の写真は、地元の林業組合の方に来ていただいて、「山に雨が降る」ということはどういうことなのかを、泥で山を作って、その辺の草をそこに刺して木の代わりにして、上からジョウロで雨を降らせて、山に降った雨は、どのように流れ、どうなると山が崩れてしまうのだろうと実験しています。そうすると、スギナのようなものを刺しておくよりも、葉っぱの広い草を刺しておく方が山が崩れにくいとか、大人が教えないのに、上級生の一言がヒントになったりして、自ら気が付いて学んでいきます。

また、左側の写真は、生き物は自分に見えているものだけではなくて、目に見えない生き物もたくさんいるぞということで、協和発酵の研究所の皆さんにご協力をいただきながら微生物をテーマとしたサイエンス・ワークショップを開いている光景です。右側

は、「空気が流れる」ということはどういうことなのかをテーマに、飛行機はなぜ飛ぶのかを自作の紙飛行機を飛ばしながら、所沢の航空発祥記念館の展示物も利用して実施した時のものです。

こちらは、DNAの抽出実験をしている場面です。白衣を着ているスタッフの方は、みな生命科学系の大学院生です。こういうときの子どもたちからは、本物と偽物をかぎ分ける、見抜く力の高さに驚かされます。私たち大人だと、立場とか職位とか、色眼鏡で見てしまいがちですが、子どもたちは本物と偽物を見事に見抜きます。私が、少々知ったかぶりをして説明すると、大学院生たちがマイクロピペットを使う時のコツを伝えようとする時とでは、全然彼らが聴こうとする真剣さが違うのです。

ここは学校ではないので、マイクロピペットの使い方にハマってしまった子どもは、どんどんそちらの方にのめり込んでいきます。私は、誰もが同じ進度で同じように進めるのでなく、そんな寄り道があってよいのではないかと思っています。そんなムダが、彼らの日常から削ぎ取られているのではないかと。

これは音楽のプログラムです。新進気鋭の若い演奏家に集まってもらったり、左側の青年はローマでバイオリン製作の職人修行をして戻ってきたばかりだったのですが、音を聞くということだけではなく、なぜ音が出るのか、なぜ楽器はこういう構造をしているのか、そんなところにも引っ張っていくわけです。

楽器の中はどんなになっているのか？一見、分かりやすいように見えるような楽器でも、子どもたちにとってはブラックボックスです。ブラックボックスが当たり前ということではなく、何で音が出るのかということまで入っていくと、子どもたちは本当に真剣に引き込まれていく姿を見ることができました。

この「てら子屋」の活動もかれこれ10年以上となりました。あくまでも研究所の実験としての展開ですから、高頻度で開催できるわけではなく、春夏秋冬の季節毎であったり、最近では夏休み中心であったり、なかなか遠くに出かけることも難しくなったり、世の中の情勢で、子どもたちを少しでも危険があるところへは連れていけなくなったりしているのですが、なんとか継続をしています。

このスライドは、「てら子屋」の実践から私が感じていることを挙げたものです。子どもたちにとって必要な場というのは何だろうということを挙げています。中でも「本物」×「本場」×「本人」という三拍子を揃えることが、子どもたちにはものすごく効果的であると実感しています。

それから、当たり前かもしれませんが「野性」×「感性」×「知性」。これらのバラ

ンスという観点からすると、今の子どもたちに決定的に欠けているのが「野性」ではないかなと思うのです。豊かな「野性」があるからこそ得られる「感性」なのではないかと、山奥などに行ってみると、子どもたちの素振りからうかがえます。

次には「科学」×「自然」×「アート」の三拍子です。これらは、学校教育の中で科目に分けられてしまっているのがもったいないように感じられます。もっともっと、分ちがたい一体の部分におもしろさがあるだろうと感じます。

「遊ぶ」×「学ぶ」×「働く」というのも同様です。これらは、特に小学生ぐらいの時期では、実際の生活の中で渾然一体となっているわけです。「キャリア教育」だからといって、働くというところばかりに絞り込んでしまうのではなく、もっともっと混沌としているような状態から学ぶことに大きな価値があるのではないかなと。

「ムリ」×「ムダ」×「ムラ」、これらは効率を求める社会において削ぎ落とすべき悪です。だから、社会のしくみは、これらを徹底的になくそうとしていますが、先ほどからお見せしているような子どもたちがいきいきとしている場面というのは、どれも無駄といえれば無駄なのです。もっと効率よくやれば幾らでもできるのですが、そういう無駄な時間、あるいはシャワー・クライミングのように無理なことをやっていたり、ムラのあることをやっていたり、そういう中から彼らが発見したり、そこから開花しておもしろい話が生まれたりということが多々あるわけです。

最後も似たように、見た目は悪い言葉ですが、「疑う」×「誤る」×「盗む」。実はこの辺にもプラスの価値を見いだせると感じています。「疑う」という気持ちがないと、今日のテーマでもある「好奇心」も出てこないのではないかなと思うのです。また、「間違っ」てみないとその先に進めない。とにかく正解を出しているだけでは学びはつまらないのです。そして、自分でできないことがあれば、人のやっている姿をジーっと見ながら、自分のやり方として盗んでいくのです。そういう意味合いでの「疑う」×「誤る」×「盗む」の重要性なのです。

このようなプログラムに子どもが参加した保護者の声の一部を紹介しましょう。例えば「おかげで、ウチの食事の会話は科学の話でてんこ盛りです」とか、ちょっと考えさせられるコメントとしては「なぜ、『てら子屋』でなくてはいけないのでしょうか？ 毎日通っている学校でなぜできないのでしょうか？」というようなものもありました。

「てら子屋」の開催に協力してもらっている、本物の人だったり、お手伝いしてもらっている人だったり、そういう人たちからの声もいただいています。北海道の山の中でのプログラムを手伝っていただいた古生物学を専攻している博物館の方からは、「東京の子に対する見方が変わった、驚いた。彼らは自分で遊びを作れる。状況の変化に対応し適応できる。それが素早い。都会の子なんてひ弱だと思っていたのに。地元の子よりすごい」というコメントがありました。大学生は大学生なりに「自分の今やっているこ



とが、将来と結び付いてきた」などという話もありました。

これはつい最近の話ですが、「てら子屋」のOB・OG、といっても中学生ですが、彼ら、彼女らに話を聞いてみた時のものです。私は、かなり驚いたというか、そこまで思ってくれていたのか、感じてくれていたのかと嬉しくなりました。

ある子の話は、家族旅行とてら子屋に行くときとで、何が違うのだろうということを考えての話でした。「てら子屋よりも家族で旅行や博物館に行くというのは自由だし好きなことをやれる。だけど、やりたいこと、知りたいこと、実は満たすことができているなかった。仲間がいないし、ちゃんと知っている大人がいないと」。また、他の子は「てら子屋は予定があるようで、実は自分たちの好き放題だった。だけど、今となっていろいろなことを考えてみると、かなりのことを学んでいたような気がする」と言ったりするのです。では、先生や仲間のいる学校はどうだったのかといえば、「みんなで同じ進み方、同じ興味の示し方、反応の仕方をしないといけないことは分かっていた。先生も教科書の知識と決められた問題の解き方以上のことは期待できないような人がほとんどだった。生徒もそれでいいと思って、それに合わせて良い子ぶっている子がたくさんいた」という。あまりにも、子どもたちが気の毒になってしまうわけです。

もう一人は「自分は、小学校時代に科学実験教室のようなところに通ったこともあった。てら子屋と似ているようで違った。そこでやる実験は何を学ばなくてはいけないかが最初から分かっていた。そのために、目の前にそろえられた実験材料を使って確かめるステップだった」と言っていました。これなどは、先ほどの佐伯先生の模倣のお話ともかなり通じるところかなと思うのです。単なる模倣に疑いを持っていたという証明とも感じられます。子どもたちは、ちゃんとそういうことに気づいているわけです。

そういうわけで、先ほどから言っている「野性」×「感性」×「知性」というのが、子どもたちの「好奇心」や「未来開拓力」の源泉を培うものなのではないかなと私は思っています。

そして、好奇心や創造力というものは、基本的に「体験」、体験以上のことは、想像力とかイマジネーションとして生み出せないのではないかという気がするのです。体験の重要性、特にその根元にはリアルな体験がずっしりと確保されていてほしいし、そういうリアルな出発点がしっかりしてこそ、だんだんとメディアを通した体験などに広がっていけばいいのではないかなと思います。

「創造力は想像力から、好奇心も想像力から、想像力は経験から、経験は、効率よりも、質と量」、質より量とか量より質ではなく、やはり質と量をどちらも取りたい。「豊かな経験の蓄積は、豊かな、時間、空間」、人間とのかかわり合いという意味で「人間

(じんかん)」から。「ヒトがヒトらしく生きる成熟社会には、そんな、ゆとり、豊かさを求めたい」そんな視座から、これからも取り組んでいければと思っているところです。長時間、ご清聴どうもありがとうございました。

---

## ■ 講演者プロフィール

### 中間 真一（なかま・しんいち）

ヒューマンルネッサンス研究所主席研究員。1959 年生まれ。慶應義塾大学工学部管理工学科卒業後、富士写真フイルムを経て現職。埼玉大学大学院経済学研究科修了。同研究所では、「自律社会」をテーマに、社会生活と科学技術の関係から未来を展望。また、国内外に未来の予兆を探索し、学びの場の兆しづくりを目指した「てら子屋」の活動も手がける。共著書に『スウェーデン—自律社会を生きる人びと—』（早稲田大学出版部）、『男たちのワーク・ライフ・バランス』（幻冬舎ルネッサンス）など。